長崎のデザインを旅する
Design in Nagasaki

長崎バイオパーク

Nagasaki BIO PARK

「自然との共存」を目指してデザインされた究極の動物園

檻のない動物園「長崎バイオパーク」では、リスザルが肩に乗ってきたり、元気に跳びはねるカンガルーにエサをやったり、気持ちよさそうに昼寝をするカピバラの背をなでたりするのは、特別なことではない。

長崎バイオパークの基本設計を手掛けたのは、東京農業大学の名誉教授・故近藤典生氏。遺伝・育種学の権威であった近藤氏は、動植物園のエキスパートとしても知られており、長崎バイオパークは彼の手によってデザインされた。

近藤氏が目指したのは「自然との共存」。そのために「どんな動物を展示するか」ではなく、「この場所にはこの動物が適している」と、環境に合わせて動物を配置する方法を選んだ。しかも動物たちは基本的に放し飼いである。

動物園をデザインするにあたり、近藤氏が大切にしたのは、地形を生かしてバラエティーに富んだ場面を演出すること。真っすぐな道が大嫌いだった近藤氏は、「曲がりくねった道の先に、パーッと視界が開け、動物が現れる…」そんなシーンを好んだという。そこには訪れる人を驚かせたい、楽しませたいという思いがあったに違いない。

一九九七年、近藤氏は八十二歳で動植物にささげた生涯を閉じたが、その意思は長崎バイオパークの基本理念として今も受け継がれている。近藤氏のまな弟子であり、副園長を務める伊藤雅男さんは「当時、近藤先生は周囲から変わり者だと思われていました。バイオパークがオープンした約四十年前は、動物を放し飼いにする動物園なんて、誰も考えもしなかったからです。先生は時代の最先端の、さらにその先を行く方でした。ようやく今、時代が追い付いたという感じがしています」と話す。近藤氏は開園後も三カ月に一度は来園し、展示方法などを熱心に指導した。時には「あの木を数センチ移動するように」など、細かな指示をしていたという。

現在、長崎バイオパークには約二百種二千点の動物と、約一千種三万点の植物が展示されている。それらは見事に共存し、私たちにありのままの自然の姿を見せてくれる。「ここは日本一、動物たちとふれあえる場所なんです」。伊藤さんのその言葉通り、長崎バイオパークはいつ訪れても多くの動物たちが迎えてくれ、私たちに自然と共存することの素晴らしさを教えてくれる。

近藤典生さん

1915年生まれ。東京農業大学名誉教授。遺伝・育種学の権威で種なしスイカの生みの親として知られている。また、独創的な構想により、長崎バイオパークや伊豆シャボテン公園など、生き物の生態を知り尽くした動植物園造りでも成功を収めた。1997年逝去。